

〔兼葭堂雜錄〕^五信州松本の城は、いにしへ武田信玄の居城にして、深瀬の城と號せし所なりとぞ。當時例年正月十一日、鹽市といふ大法會あり、生土宮村大明神の社司、當日市神或は鹽市大明神ト云と號し、城下の市中に社壇をかざりて、神事を執行ふ、遠近よりこれに群參して賑へるゆへ、觀物放下師など夥く有て、隣國に無雙紋日なり、然るに亦城下の富家よりして、鹽を些づ、紙につゝみ、參詣の多勢に施す、おのゝは是を受得て家土産とし、或は神棚に供ふ、此事往昔より有て、其初ること最久しとぞ。里人傳へて云、往昔戰國の折から、敵方よりして當國へ鹽運送の道を塞ぎ、國兵を苦めんとす、さる程に自から鹽乏しく漸に盡て、國兵しばゝ氣力を失ひ、幾難儀に及べり、然るに隣國の好みを以て、越後の長尾謙信より鹽を運送す、國兵これに力を得て、戦ひに敗せず、頗る勝利を得たりとぞ、その吉例によつて、後世にいたりても尙鹽市と號して、是を祝ふものなりと聞ゆ、實鹽は五味の中にして、一日も缺べからざるものなり、

〔江戸總鹿子〕^五鹽屋。

小あみ町新堀 新橋北出雲町横丁

〔東大寺正倉院文書〕^{十七}駿河國天平十年正稅帳

買鹽漆斗捌升直稻貳拾陸束 束別充鹽三升

〔東大寺正倉院文書〕^{十九}伊豆國天平十一年正稅帳

毎年正月十四日讀金光明經四卷、又金光明最勝王經十卷、合壹拾四卷供養料稻肆拾玖束、略○中

鹽壹升玖合貳勺價稻陸把肆分、略○中

依太政官天平十一年三月廿四日符、講說最勝王經調度、價稻壹仟肆伯玖拾伍束、略○中

供養料稻伍拾伍束、略○中

鹽貳升壹合陸勺價稻漆把貳分

鹽直